

〔畑 作〕

夏大豆新品種「オリヒメ」について

吉富 進・百島敏男・熊本 司  
(佐賀県農業試験場)

YOSHIDOMI, S., MOMOSHIMA, T. and KUMAMOTO, T.

On the New Variety of Summer-type Soybean, "Orihime"

1. 育 種 目 標

九州の夏大豆の収量が低いのは、草型が小さいことが最も大きな原因となっている。そこで筆者らは草型の大きい新3号を導入して九州の夏大豆の大型化をはかり、コガネダイズ、フジススメ等の大型夏大豆を育成し、収量も比較的増加させることができた。

しかし草型を大きくしたことによって成熟期は次第におそくなった。元来九州での夏大豆は早生種の栽培が多く、生育日数が短い。このため早まきにして生育日数を長くしなければ増収できない。しかし夏大豆は前作麦の作式あるいは麦の熟期の関係上、早まきされる場合はきわめて少ない。このようなことより、は種期がおくれると成熟期がますますおくれ、台風や、干ばつの被害を受けやすく、また虫害を受ける。このような理由で筆者らは、早生、多収、良質の品種育成を目標とした。

2. 来 歴

「オリヒメ」は昭和28年佐賀県農業試験場において、新3号(新潟産)を母とし、白莢1号(熊本産)を父として人工交配を行ない、以後選抜固定につとめた。昭和33年から佐交27~11の系統番号で生産力

の検定を行ない、昭和34年に「西海9号」の系統名をつけ、関係各県に配布し、地域的適応性を検討した結果好成績をあげたので、昭和42年5月「大豆農林47号」に登録され、「オリヒメ」と命名された。

3. 一 般 的 特 性

オリヒメはII<sub>2</sub>に属する夏大豆で、熟期は白莢1号より1週間近くおそいが、コガネダイズより4~5日早く、両品種の中間に位する。したがって九州の夏大豆の中では早生の晩に属する系統である。

生育はきわめて旺盛でよく繁茂し、成熟期が早いにもかかわらず草型は夏大豆中もっとも大きい部類に属する。主莖節数、分枝数、莢数が多い。草丈が高いためやや倒伏しやすい欠陥がある。

花、胚軸は紫色、莢は暗褐色を呈し、白色の毛茸が密生している。子実は球形、豊円で粒揃いがよく品質がすぐれている。粒大は九州の夏大豆の内では中粒に属する。

病害に対する抵抗性は、葉焼、銹病、紫斑病等に対していずれも強いとはいえない。つぎにシロイチモジマダラメイガに対しては、元来品種本来の抵抗性は少なく、被害の多少は成熟期の相違からくる回避性の大小によるものであり、九州では8月中旬ま

第1表 オリヒメおよび両親の特性

品 種 名	開花期 月日	開花迄 日数	成熟期 月日	生育日数	莖 長 cm	節 数	分枝数	莢 数	百粒重 g
オ リ ヒ メ	6. 26	59	8. 15	110	65.6	16.7	4. 3	103.6	15.0
♀ 新 3 号	6. 25	58	8. 21	116	54.4	14.0	4. 2	82.9	18.2
♂ 白 莢 1 号	6. 23	56	8. 9	103	48.1	13.2	3. 1	43.0	16.5
比較コガネダイズ	6. 26	59	8. 18	113	56.3	14.6	4. 1	95.2	14.1
品 種 名	胚軸色	花 色	莢 色	毛茸の色	毛茸の多少	粒 形	粒 色	臍 色	品 質
オ リ ヒ メ	紫 色	紫 色	暗褐色	白 色	中	球 形	黄白色	淡褐色	上
♀ 新 3 号	〃	〃	褐色	褐 色	〃	〃	〃	〃	中
♂ 白 莢 1 号	〃	〃	白 色	白 色	〃	〃	〃	褐 色	上
比較コガネダイズ	〃	〃	褐 色	褐 色	〃	〃	〃	淡褐色	上

でに成熟すれば、シロイチモジマダラメイガの被害はほとんど回避される。

したがってオリヒメは適期に播種すれば8月15日頃までに成熟するので、その被害は少ない。

#### 4. 生産力

オリヒメ(第2表)は熟期的には白莢1号とコガ

ネダイズの中間の系統であるが、収量は白莢1号より約60%程度増収し、1週間近くもおそいコガネダイズとほとんど同程度か、年によってはかえって多収なことさえあり、年次による差が比較的少なく作柄が安定している。

第2表 生産力検定試験成績 (昭34~41年平均)

品 種 名	開花期 月日	成熟期 月日	生育口数	莖長 cm	節数	分枝数	莢数	アール当り収量		標準比率 %
								全粒重kg	精粒重kg	
オリヒメ	6.24	8.14	119	61.5	14.5	3.9	75.6	23.1	20.8	158
コガネダイズ	6.24	8.21	125	57.6	13.8	3.6	97.9	23.4	20.9	157
白莢1号	6.19	8.8	113	47.5	13.3	3.2	55.7	15.4	14.0	100

なお、将来大豆の機械化栽培を想定して、麦刈りあとの晩播栽培に対する適応性をみたところ、第3表のような結果を示した。この結果でもわかるように、極端な晩まきでは早まき区には劣るが、その減

収率はオリヒメが最も少なく、また白莢1号に対する比率をみても、75%も多収で、コガネダイズよりも増収したことから、本品種の晩まき適応性が高いことが推定される。

第3表 晩まき適応性検定試験 (昭37・38・40年平均)

品 種 名	開花期 月日	成熟期 月日	アール当り収量		早まき区に対する比率 %	白莢1号に対する比率 %	百粒重 g
			全粒重kg	精粒重kg			
オリヒメ	7.22	9.6	17.3	14.4	93	157	14.6
コガネダイズ	7.22	9.10	15.5	14.1	89	139	12.9
白莢1号	7.20	9.4	11.0	8.3	88	100	14.4
改良白目*	7.20	9.4	14.3	11.6	118	130	13.7

注) は種期は早まき区4月中旬、晩まき区6月上旬  
\*改良白目は昭37・38年の成績

密植試験(第4表)の結果では各品種とも密植により増収したが、その品種間差は少なく、白莢1号に対する増収率ではコガネダイズが最も高く、65%

増を示したが、本品種でも60%増収し、密植適応性もかなり高い。

第4表 密植適応性検定試験 (昭34~40年、35年除く)

品 種 名	開花期 月日	成熟期 月日	アール当り収量		疎植区に対する比率 %	白莢1号に対する比率 %
			全粒重kg	精粒重kg		
オリヒメ	6.23	8.14	20.7	18.6	102	160
コガネダイズ	6.23	8.20	22.4	19.8	103	165
白莢1号	6.19	8.8	13.7	12.0	103	100
改良白目*	6.16	8.4	9.7	8.9	79	94

注) 疎植区の栽植密度は標準栽培法により、密植区は標準区の2倍  
\*印 改良白目は昭38・40年の成績

#### 5. 品質

子実は豊円で球形、粒揃いがよく黄白色である。臍色はうすく、品質は良好である。子実成分について

は九州の夏大豆中特筆するほどの特色はないが、蛋白質含量では白莢1号にはやや劣り、コガネダイズ、改良白目、白口1号にはまさるとも劣らぬ結果を示

し、九州の代表的夏大豆である。

#### 6. 適地および奨励品種採用県

配布先における試験成績から、本品種は成熟期が早いにもかかわらず、ほとんどの試験地で比較品種より莖長が高く、草型の大きいという特性をよくあらわし、収量でも九州、山口の各県ではアール当り20kg以上の収量をあげ、現段階では多収品種に属する。ただ九州でも都城など2～3の試験地で比較品種より減収したが、これらの地帯は地力が高く晩生種地帯が多く、比較品種が晩生種となっているため、東海近畿、四国なども対照品種が晩生種であるため減収した。したがって九州の夏大豆早生地帯が主な適地である。昭和42年度鹿児島県において、改良白目および白口1号に代わるものとして奨励品種

に採用された。

#### 7. 栽培上の注意

本品種は草型が大きいことが特色となっている。しかしその特色が十分発揮されるのは地力の低いところであり、肥沃な地帯では年により倒伏して減収の原因となることがある。したがって地力の高いところに栽培する場合、または多肥あるいは極密植栽培を行なう場合には、倒伏するおそれがあるので注意しなければならない。

なお本品種は早生であるので、シロイチモジマダラメイガに対する薬剤防除の必要性は少ないが、晩まきした場合あるいはダイズサヤタマバエ、カメムシの発生が多いところでは薬剤散布が必要である。

